

土溜む

つちぬる

冬の冷え込みが和らぎ、凍えていた大地が次第に温かさを取り戻す様子を表す季語。地中では静かに生命が動き始めているのだと、早春ならではの変化を感じています。



トンネル被覆で、冷え込みからねぎたちを守り、できるだけ安定した温度環境を保ちながら育ててきました。これからは春のあたたかで柔らかな日差しを浴びて育ててもらいます。

今月のことねぎ

今月、みなさまにお届けする九条ねぎが京都でどのように育ったものなのか、物語（事）を少しでも知っていただき、より美味しく召し上がっていただければと思います。

秋から半年かけてじっくり育った冬葱たち

昨年10月に定植し、亀岡・京都市内の畑で育った冬葱。暑い夏を乗り越えた苗がようやく力を取り戻し始める時期の定植だったので、より丁寧な植え付けを心がけ、苗がしっかり根付くよう管理を徹底。活着を促すための葉面追肥を欠かさず行いました。秋から春、およそ半年かけてじっくり育つこの作型は、株元の白い部分が長くなるのが特徴です。青ねぎでありながら、白い部分は水分を多く含み、甘みが強く辛味もやわらか。寒さを乗り越えたからこそ生まれる、やさしい味わいです。



古都・事・言 3つの「こと」を伝えます
ことねぎだより

NO.226
2026年3月号
TEL: 075-601-0668



農人たちの畑での作業の様子、THE 農業!の現場の「こと」を発信



トンネル被覆を外す時も、手作業で協力しながら進めています。

冬支度として行った被覆のトンネルを撤せるの大変でしたが、外していく作業もまたひと苦労です。



春はすぐそこ、土台の土作りからこだわる

今年の冬は、ここ数年の暖冬傾向と比べると、冬らしい厳しい寒さとなりました。京都府北部の丹後や美山では積雪が多く、一方で京都市内では1か月以上ほとんど雨が降らない時期もあり、地域ごとに大きく気候が異なる冬となりました。その寒さからねぎを守るために行っていたビニール被覆ですが、2月下旬から3月にかけて順番に外していきます。雨に当て、追肥を行い、気温の上昇にも助けられ、春に向けた生育の後押しをしています。同時に、春作に向けた準備もスタート。作付予定の圃場ごとに土壌分析を行い、その結果をもとに施肥設計を実施。それぞれの畑に必要な分だけ施すことを大切にしています。適切な施肥は、ねぎの健やかな生育を支えるだけでなく、環境への負荷軽減や病害虫の予防にもつながります。その結果、農薬の使用量削減にも結びつきます。それぞれの工程にこだわり、ねぎづくりに取り組みます。

とある日の農人日記。

畝立ての補助に入らせてもらいました。久しぶりに新しい作業を覚えることができ、体は疲れましたが楽しかったですし、時間が経つのが早かったです。次やる時まで、忘れないようにするのが1番大切です。(収穫班・宮崎)



こと京都は「野菜を食べてよう」プロジェクトのサポーター企業です

私たちは、農林水産省が実施している本プロジェクトの趣旨に賛同し、九条ねぎを通じて野菜の消費拡大に取り組めます。